

## 知識所有が外国好感度に与える影響

—「政治と科学に関する意識調査 (PIAS)」の分析—

株式会社原子力安全システム研究所 藤田智博

### 1 目的

社会や歴史の知識の有無が、外国好感度を高めるのか否かを明らかにする。先行研究によれば、日本人の外国好感度は、長期的には、欧米の資本主義国において高く、旧社会主義圏やアジア諸国において低い。他方で、近隣諸国との関係や外交の進展によって、中期的には変動する(三宅 2001)。本稿は、2000年代の排外主義運動の浮上の要因とされる歴史に対する態度を考慮した分析を行う。右派論壇において、2000年前後から、東アジア地域と歴史問題の記事の比重が高くなったという(樋口 2014)。歴史修正主義は、教科書の内容を批判するが、その議論からは、「正しい」知識を得ることと近隣諸国への好感度が関連しているのではないかという仮説を引き出すことができる。

### 2 方法

データとして、「政治と科学に関する意識調査 (PIAS)」を使用する。調査の概要については同じ部会の第一報告(太郎丸)を参照されたい。変数として、外国好感度、社会や歴史についての知識のほか、韓国ダミーと中国ダミーを用いる(個人内部で変化する変数)。また、性別、年齢、学歴、従業上の地位、外国人の知り合いの有無、歴史修正主義的な態度を用いる(個人内部で変化しない変数)。外国好感度のような複数の選好をたずねる質問項目の場合、回答に個人の「クセ」が介在している可能性があり、従来の分析方法では、その影響を考慮することができない。他方で、クロスセクショナルな調査においても、データの取得方法を活かすならば、個人の「クセ」を考慮することができる分析方法も提案されており(筒井 2011)、それを踏まえ、本稿では、固定/ランダム効果モデルを用いた分析を行う。

### 3 結果

複数のモデルの分析の結果、知識所有と国ダミーの交互作用項が有意であり、知識所有の影響が、どの国の知識であるのかに依存することが明らかになった。アメリカの場合、知識所有は好感度に正の影響をもたらすが、中国、韓国の場合、逆の影響がみられた。また、中国と韓国に関しては、係数は決して大きくないものの、知識所有の2乗項と国ダミーの交互作用項の正の効果があることから、知識所有と好感度の関係は、国によって線形ではないことが明らかになった。さらに、ランダム効果モデルの推定からは、観察されない異質性がもたらす分散が無視しえないことから、複数の外国の好感度を回答するに際し、個人の「クセ」が介在している可能性が示唆された。

### 4 結論

歴史や社会の知識の有無は、好感度に対して、線形の影響を同じように与えているわけではない。そこには、2つの意味がある。一つは、どのような国の知識であるのかによって、影響の向きが変わることである。もう一つは、たとえ、もともとの好感度が低い国であっても、知識所有が極端に多い場合は、好感度がやや上向くことである。中国や韓国においては、むしろ、知識が無いことのほうが好感度を高める。さらに、好感度のような選好の表明に際し、個人の「クセ」が影響をもたらしていることが示唆されたことから、個人の特徴がどのような歪みをもたらしているのかについて、さらなる探求が必要だろう。

文献(一部) 樋口直人、2014年、『日本型排外主義』、名古屋大学出版会